

脂質代謝異常最前線 治療の進化を追いかける！

脂質異常症の管理は、動脈硬化性疾患の一次予防および二次予防のいずれにおいてもきわめて重要な課題である。わが国においても心血管疾患は死因の2番目を占めており、高齢化に伴い、さらなる患者の増加が予想されている。動脈硬化性疾患の治療において、脂質低下療法はその中心的な位置を占めているといっても過言ではない。

LDL コレステロール低下療法は、スタチンを中心とした薬物治療の発展により、これまでに多くのエビデンスが蓄積されてきたが、近年はさらなる低下を目指した治療戦略が求められている。PCSK9 阻害薬の登場は脂質低下療法に新たな地平を切り拓いた。モノクローナル抗体製剤による強力な LDL コレステロール低下効果が明らかとなり、すでに二次予防領域では重要な治療オプションとして位置づけられている。さらに近年では、siRNA 技術を応用した新しい PCSK9 阻害薬が登場し、投与間隔の延長やアドヒアランスの改善といった実臨床上の利点も期待されている。これらの製剤の長期予後に関するデータの蓄積が、今後の治療指針に大きな影響を与えるであろう。ペムペド酸はスタチン不耐例を含む症例に対して有用性が示されており、作用機序の異なる選択肢として臨床応用が進んでいる。また、ANGPTL3 阻害薬は LDL のみならずトリグリセライドも低下させることから、より包括的な脂質管理の可能性を示している。さらに、Lp(a)を標的とした新規治療薬も開発が進んでおり、これまで手つかずであった残余リスクの低減が期待される。EPA 製剤を含む n-3 系多価不飽和脂肪酸製剤の再評価も進み、炎症やプラーク安定化など、脂質代謝を超えた作用機序が注目されている。脂質異常症治療の目標は、単なる数値の改善から、より包括的な心血管イベント抑制へと変化しつつあるといえる。

本特集「脂質代謝異常最前線 治療の進化を追いかける！」では、こうした新たな潮流を多角的に取り上げることとした。エキスパートの先生方に執筆いただいた本特集では、脂質低下療法の進歩と今後の方向性について、最新の知見をまとめて紹介することとしたい。

北里大学医学部循環器内科学
阿古潤哉